

《アンケート調査結果よりわかった主なポイント》

1 患者のジェネリック医薬品に対するイメージ

- ・ 患者がジェネリック医薬品を「使いたくない」と考えている割合は1割強であった。資料1(2)②
- ・ 「使いたい」と考えている割合は約3割、「こだわりがない」が2割弱、“性状や使用感が異なる場合”や“深刻な病気の場合”“薬代に差がない場合”といった理由で「場合によっては使いたくない」との回答が約4割であった。資料1(2)②
- ・ ジェネリック医薬品を希望した経験がある患者も約4割いた。
- ・ 以上のことから、ジェネリック医薬品について、それほど不安を持っていないことがうかがえる。資料1(2)④
- ・ なお、医師・薬剤師の約半数がジェネリック医薬品の効果の違いを経験したとしているが、患者では約1割程度であった。資料1(4)①、(4)③

2 ジェネリック医薬品に対する不安の理由

- ・ 外来患者への院外処方について病院医師・診療所の約4割がジェネリック医薬品の使用に積極的ではなかった。資料1(5)①
- ・ また、実際に使っている病院医師・診療所や薬局の5～6割が、ジェネリック医薬品に対する不安を感じていた。資料1(5)①-1
- ・ その理由として最も多かったのが「効果の違い」であったが、“実際に効果の違いを経験している”といった回答よりも、“添加剤が異なること”や“承認審査の試験項目が異なる”といった回答の割合が多く、『ジェネリック医薬品＝品質が異なる⇒効果が異なる』と考えている可能性がある。資料1(5)①-2、(5)②
- ・ また、不安の理由として、「情報が不足している」との回答も1～3割あった。資料1(5)①-2、(5)②

3 ジェネリック医薬品の情報

- ・ ジェネリック医薬品の情報が不足しているとの回答が病院医師・診療所では約7割、薬局においても約5割あった。資料1(4)②-1
- ・ ジェネリック医薬品の情報はPMDA（独立行政法人 医薬品医療機器総合機構）のホームページにも掲載されているが、病院医師や診療所では、PMDAのホームページの認知度が約2割と低かった。資料1(4)②-2

4 ジェネリック医薬品を勧める機会

- ・ 病院医師・診療所は、患者の負担割合を考慮して勧めていた。
資料1(1)②
- ・ 勧めるときに考慮することと不安の理由の関係性は見られなかった。
資料1(5)①-2
- ・ 薬局は初回の来局時に勧めている傾向がみられた。
資料1(1)②
- ・ 患者の多くは、病院・診療所や薬局からの勧めによりジェネリック医薬品を使用しているといった結果であった。
資料1(2)③
- ・ しかしながら、ジェネリック医薬品を勧めないとの回答も病院医師・診療所では2割弱あった。
資料1(1)①

5 薬局が調剤した医薬品の銘柄情報

- ・ 薬局がどのような医薬品の銘柄を選んでいるか分からないことに不安を感じている病院医師が約4割、診療所では約5割であった。
資料1(3)①
- ・ 薬局は銘柄の情報提供を約8割が行っていた。
- ・ 病院では「受けていない」が約3割であったが、病院医師では「受けていない」との回答が約5割強であった。
- ・ 診療所では、約4割が情報提供を受けていなかった。
資料1(3)③

6 薬局の銘柄選択理由

- ・ 薬局は、「安定供給」や「包装単位が小さいこと」を重視してジェネリック医薬品を採用していた。
資料1(3)②-2
- ・ また、調剤時に「患者が使用しやすい工夫がされている」等「患者に応じて最適な銘柄を選択する」のではなく、薬局に在庫があるものを調剤していた。
資料1(3)②-1